

内発的動機づけに関する考察 (I)¹⁾

松 田 君 彦

はじめに

思想の歴史において、人間性の本質をどの様に考えるかということは、動機づけの問題に対してどの様な答を用意するかに大きく左右されて来た。人間性というのは、これまで人間の行為や思考の原動力についてなされた仮説に従って、不変固定的なものだとかあるいは自由に变化しうるものだとか、善なものだとか悪なものだとか非合理的なものだとか合理的なものだとか、利己的なものだとか利他的なものだとか、好戦的だ、いや平和的だとかいろいろに考えられて来た。そのつど、人間性に関するこれらの仮説は政治的、経済的な制度の構造に具現化されたり、また、これと同じ仮説が教育の目的や手段を決めるのに役立って来た。例えば、政治的構造の側面について言えば、マキアベリ－は人間の本性を非合理的で、利己的で好戦的であり、策略や弾圧によってしか、適切な行動を身につけさせる社会化はできないという仮説によって、強力な独裁政治への欲求を正当化した。これとは逆に、多くの民主国家では、人間は自由に合理的な選択を行なうことができるという仮説に立って政治構造の改革を行なって来た。彼らは指導者とか多数派による専制的な抑圧を最も恐れた。その結果がチェック&バランスのシステムである。教育の側面についていえば、²⁾「原罪、として教義にも含まれている、人間は本来³⁾「悪、であるというカルビンの仮説は、育児や教育における厳格な規律や強い罰則に対して概念的な正当性を与えた。逆にルソーは、人間は生まれつき⁴⁾「善、であると考えて、この仮説を育児や教育における nurturant 的アプローチを正当化するのに用いた。

I 動機づけの問題に対する伝統的に有力な回答。

動機づけに関する最初の問題は、何が有機体の行動を引き起こし、そして何がそれらを止めるのか、ということであった。伝統的に支配的だった概念体系によれば、行動の始発者には (1) 強い痛みを伴う外部刺激 (2) 飢えや渇きといった様なホメオスタティックな欲求 (3) 性の三種類がある。またそれに加えて、元来は中性刺激であったものが、種々の一次動因刺激によって引き起こされた情動反応と連合させられ、それらに対する条件刺激となっていた様な経験に基づいた獲得動因もある。これらの種々の始発者は覚醒とか興奮という般化された内的状態を作り出すものと想定され、ウッドワース (Woodworth) が最初にアメリカに紹介して以来、動因 (drive) と呼ばれて来た。動因は有機体を行動へとかりたてるが、この様な一次的あるいは獲得的動因刺激が有機体に作用するのをやめた時、行動も停止すると考えられる。

動機づけに関する2番目の問題は、何が活動にエネルギーを与え、活動をコントロールするのかという疑問である。これに対する答は、痛み刺激の強さや、ホメオスタティックな欲求の程度、あるいは、もともとは一次的動因刺激に対する全体的な反応の中の一部であった情緒的反応の強さの中に見い出されてきた。

動機づけの3番目は 快楽方向性 (direction-hedonic issue) の問題に関するものである。それに対する答は動因低減という見地から来ている。有機体は動因レベルを増加させる様な事態からは身を引き、それを避けようとする。逆に動因レベルを低減させる様な事態には近づき、それを求めようとする。言語能力のない動物にあっては、ある事態からの撤退や回避は負の快楽的価値を示すものと仮定されてきた。逆に、刺激源に近づこうとしたり、ある事態になることを求めようとするとは、正の快楽価と結び付いているとみなされる。恐らく言語を持たない動物にあっては、何が快かということと行動として現われる方向的なものとを切り離すことは不可能であろう。一方、言語を持った人間にあっては、快楽的価値と行動の方向の等価性は研究を要する問題となってくる。

動機づけの4番目の問題は、カセクシス²⁾とか、アタッチメント、あるいは愛といった様な事柄を何によって説明するのかということである。これもまた、動因の低減という見地から答えられてきた。有機体は動因の低減に導いたことのある物や人、場所に情緒的アタッチメントを発達させると思われている。この様な理由から、人間の幼児は飢えや種々の不快、あるいはこれに伴う過去経験に基づいた不安などを軽減させてくれる母親に対して愛情を示す様になると思われる。同様に、行動理論でいうところの「二次的強化、(secondary reinforcement)」とは、これまで動因低減と連合させられて来た中性刺激が一次的動因とかあるいは不安などを信号的に軽減することである。

5番目の問題は反応の選択に関することである。これに対しては動因刺激と、それに結び付いた有機体の過去経験という見地から答が与えられた。それぞれの動因刺激に対しては先天的にそれと結びついた反応体系があり、選択された反応は過去におけるその様な状況との出会いで、その動因を効果的に低減させるのに役立ったものであると考えられている。

6番目の問題は、目標の選択をコントロールするのは何かということである。短い目でみればこの問題は、既に答えた始発の問題と同じである。しかしながら長い目で見れば、これは人間の行動に特徴的な行程の長い目標行動に関したものである。属 (generic) という立場からこの問題もまた動因の低減という見地で答えられて来た。なぜならば、これはフロイト (1905, 1015) が全ての行動や思考の「目的、であると考えていたところのものだからである。この行程の長い目標——選択の問題に関する証拠の大部分は、心理療法における悩める人々の観察とか、あるいはネズミの様な実験室の動物を使った実験から得られているので、この試案的な答はせいぜい推論の域を出ないものである。

7番目の問題は、行動の変化あるいは学習のための基礎に関するものであるが、フラストレーションというのが伝統的に支配的だった概念体系の中から与えられた回答であった。条件が非常に変化し、いかなる反応様式も動因を低減しなくなった時、その結果としてフラストレーションが生ず

る。その反応様式は、既成のヒエラルキーの中の他の反応に対して相対的に弱まると仮定される。この様なことが、ある反応様式が動因の低減あるとは、もともとその動因が原因となって生じた情動的苦悩の軽減に役立つまでは次々に試みられる。

8番目の問題は、有機体はなぜ条件が変化した時にも所与の反応を用い続けたり、あるいはまた所与の目標を求め続けたりするのであろうかという事である。これに対する回答はある行動がその動因の低減に成功した回数という見地から、あるいはマウラー (Mowrer, 1960) が逆向性条件づけ (counterconditioning) と呼んでいるところの見地から与えられてきた。マウラーは条件づけの結果として以前に中性的であった刺激が不安を軽減し、「希望」や「安心」をもたらす様な場合、これを希望と呼んだ。たとえば一次的動因として電撃の様な有害な刺激を用い、それが停止する直前または直後に何かシグナルとなる刺激が与えられるならば、そのシグナル刺激は不安の軽減への期待を生じさせるようになる。

II 内発的動機づけの基礎

動機づけに関する問題の大部分に対して、伝統的に有力な心理学理論が与えて来た回答は動因の低減という単純なものだったが、そのことがこの理論にかなりの品位を附与する結果ともなっている。更に実験的研究という頑丈な機構から得られた証拠であるために、これらの答は経験的な支持という防壁を有している。そしてまた、それらは適度に (within limits) 真実である。他方、この理論は不適切でもある。この理論は、全ての行動は動機づけられていると主張してきた。この様な言い方の中には、全ての行動は痛み刺激とか、ホメオスタティックな欲求、性、あるいはこれらを基礎にして獲得された動因といった外発的 (extrinsic) な力によって動機づけられているということが暗に含まれている。この様な外発的な動因刺激の働きがない場合には有機体は恐らく静止して動かなくなるだろう (Freud, 1915, Hall, 1943)。しかしこの様なことは明らかに事実と反する。主として第二次大戦以降になされた数多くの研究は、これらの一次的動因、あるいはそれを基礎にして獲得された種々の動因が欠如している状態で、動物たちが遊んだり、物をいじり廻したり、新しい空間領域を探索したり、新しい知覚的な入力源を探し求めたりしたことを述べている (文献は J.M. Hunt, 1963b を見よ)。事実、遊び、探索、操作、好奇心からくる行動などが最も生じやすいのは、正しく痛み刺激とか、ホメオスタティックな欲求、あるいは性的衝動が欠如している時であったり、またそれらに基づいて獲得された動因が最小限の時である。動物は痛みを感じている時にはものを食べないとか、あるいは空腹な時には性衝動を起こさないといった事実を考え合わせると、このことは動機づけの起源に関する体系的な階層説を唱えたマズロー (Maslow, 1954) の仮説に信用を与える。種々の動機づけの問題に対する伝統的な回答を例証する証拠にも拘らず、この有力な理論は全ての行動を説明するものではない。

更に、目とか耳などの遠受容器の機能に本来具っている動機づけ体系の実態については長い間適切な理論的関心が払われなままであったが、この様な動機づけ体系は、あの有名な唾液条件

づけに関する研究を始めた直後にパブロフによって着手された「定位反射」の研究に暗示されていた。また、あまり注目はされなかったけれども、たとえばネズミは自分達にとって新鮮で珍しい対象物で満たされているダシール迷路 (Dashiell maze) に到達するためには、住み慣れた巣を離れ、電気の通じている格子をも横切っていくという発見に基づく、伝統的な動因理論に対するニッセン (Nissen, 1930) の異議もあった。この様な初期の証拠を無視していたということは、そのこと自体が恐らくフェスティンガー (Festinger, 1957) が、「認知的不協和」と呼んでいるものによって内発的に動機づけられていたのだろう。これらの多数の小さな証拠は、動因理論に関する従来の支配的な概念的信念が単純に信じるにはあまりにも矛盾していることを示していた。

第二次世界大戦以降に、この様な矛盾した証拠、それも特に自分の実験室から得られた証拠を初めて精力的に強調したのはハーロウ (Harlow, 1950) だった。彼は動機づけに関するネブラスカ・シンポジウムの最初の会場で非常に力強い、そして非常に一般化した形での講演を行った (Harlow, 1953)。それ以来、好奇心に関するバーライン (Berlyne, 1960) の研究とか、ネズミにおける自発的修正や探索行動に関するモントゴメリー (Montgomery, 1952, 1953a, 1953b, [1954]) の研究、サルにおける視覚的探索の誘因価に関するバター (Buter, 1953) の研究、あるいはまた、人間は3~4日あるいはそれ以上も続く変化のない同質の刺激入力に対しては、非常に耐え難いものであるというマッギル大学での発見 (Bxrtton, Heron, & Scott, 1954, Heron, Doane & Scott, 1956 を見よ) などから、これを支持する様な大量の証拠が引き出された。要するに、あらゆる行動は全て、情報処理にとっては非本質的な (外発的な) 力によって動機づけられているという主張は、この証拠によって支持できないものとなる。

それにも拘らず、痛みとかホメオスタティックな欲求、性、あるいはそれらを媒介として獲得された種々の動因が欠如している事態での行動に対するいくつかの理論的な認識の仕方にはどうも不適切なものを感じる。まず第一には、遊びとか探索、操作、好奇心といった種々の活動の各々を説明するための動因の命名、刺激や変化を求める欲求の命名、それに接触や移動への衝動の命名ということにある。この様な動因や欲求、衝動の命名はマクドウガル (McDougall 1908) の本能の命名の再来を思わせる。我々は30年代と40年代に魂を探し求めて理論的方法論の中へ専門的なさまよいの旅を経験した後なのだから、もっと良い方法を知っているはずである。これらの命名された動因や欲求、衝動が種々の活動を説明するものとして受け入れられる限り、それは理論的に遺憾なことである。なぜならば、たとえ (現象的には) それらが単なる理論的な往復にすぎないにしても、そのことが本当の理解のための思考や研究を遅らせることになるかも知れないからである。

二番目には、外発的な力の存在しない場面における行動の理論的な認識の仕方が、種々の活動をその目的上の重要性から命名するという方法を用いている点である。この様な例としては、マスターしたいという欲求 (urge to mastery, Hendrick, 1959) とか、もっと最近ではホワイト (White, 1959, 1960) が見事にその証拠をレビューした中で提唱し、後にネブラスカ・シンポジウムでも報告した「能力への動機づけ」 (competence motivation) などがある。この様な目的の重要性

を示すことばは分類とか記憶術的工夫としては役に立つかも知れないが、しかしまた、前件—後件の関係 (antecedent—consequent relations) について何らの仮説をも示唆し得ないという意味で不適切であり、もしこれが受け入れられた場合には、やはり実り多い思考や研究を遅らせることになるかも知れない。

不適切な理論的認識の仕方の三番目は自動的活動³⁾を仮定したことにある。数年来「生きている」ということは、活動的であるということだ、というのが殆んど流行になって来ており、Cofer and Appley (1964) や Hebb (1949), J. McV. Hant (1960), Miller, Galanter, and Pribram (1960), Taylor (1960) らによってなされた定式化では、ある種の活動は自動的になされるので、行動を始発するのは何かという問題には答える必要がないという仮説が最近考えられている。この様な仮説が、動因や欲求、衝動などの命名が、理論的目的にとっては有害であったのと全く同じ理由で、同様に有害なものであるということをハントに悟らせてくれたのは、同僚のオーケリー (L. I. O'Kelly) であった。一次的動因とか獲得的動因が存在しない場面で行動が生じるということに対するいろんな方面からの証拠を概観してみた時、ハントは少なくとも、情報処理活動に本来具っている動機づけのメカニズム——これを彼は内発的動機づけと呼んだが (Hunt, 1963b) —— のアウトラインを知ることが出来た。

ニール・ミラーはすばらしい発見的な行動の基盤に関する動因低減説を堂々と擁護し、それがほぼ10年の間この理論の主要な支えとなってきたのであるが、彼は2年前の動機づけに関するネブラスカ・シンポジウムにおいて、動因低減に代る様な概念に導く考え方を提唱した (Neal Miller, 1963)。ハント自身も長い間動因低減の信奉者の一人だったのが、その転換はより早く始まり、そしてより徹底したものだ。ハントは今でも動因低減説はある種の真実、特に痛み入力を生じさせる様な事態に対しては真実を含んでいると考えているけれども、彼の動因低減説に代る定式化の主な主旨は、これまで述べてきた証拠によって部分的には示唆されている様に、内発的な動機づけ、あるいは有機体が遠受容器を通して行なうところの環境との情動的交互作用とか、意図的な予期的目標行動 (goal—anticipating action) の中に本来具っている動機づけを承認することである (Hunt, 1963b)。自由とか合理性というのが、有機体の環境との情動的交互作用に基づいた行動や選択を意味する限りにおいて、これらの新しい証拠は、人間は自分に有役な情報、またその情報を処理できる能力に基づいているという意味で合理的な決定を、少なくとも部分的には自由に下し得るという主張を支持するものである。

内発的動機づけと始発の問題

動機づけに関する認知的理論にとっての障害物の一つは始発の問題に答を与えることができなかったことである。これは Tolman (1938, 1945) の認知理論において明らかである。この問題は動因理論にとっては容易なものであった。ある所与の活動パターンの始発は動因刺激の発生であった。この刺激を停止することによってその活動はストップした。

